

## 逗子への巡検

二年 梅月 睦子

逗子へ行つてはつとしたとたん「これはミルト岩で泥岩とまじり----」とさつぞくノート取りをせねばならぬとなつた。後の道で車が大きな音をたてて走っている。先生の声がよく聞えない。人のノートをのぞき見する。すると更に次の所がわからなくなる、とにかく一介の余裕もない。巡検というとすぐ浮んでくるのは忙しいことである。その場所での説明が終り、他の場所へ移動する。そこでやつと息をつく。次の場所へ移つてから又前と同じようにせつせとノートを取る。

途中における空の青さ、山の緑、どこも美しい。都会とはまるで違つた雰囲気、幼い頃を思い出す。すばらしいなあ。次に浮かぶのが自然の美しさである。逗子海岸でのある雄大さ、波の音、空と海との調和、潮風の匂い、本当にすばらしい。巡検でなく一人でぶらぶらと今度来てみようとは何度か心の中でくり返す。

午前中何が何だかよくわからなかつた事も午後になると、ここらの地質構造はこうなつていんだなああとやつとわかるようになる。自分の頭の悪さをつくづくと感じさせられたのも巡検で浮かぶことの一つである。

## 浅海先生の巡検

三年生

今回の巡検は、1月から巡検地の論文発表による勉強に基いて、行われました。上級生から浅海先生の巡検は、歩くことが多いし、昼食も喰べられないこともあつて、大変だと聞かされていましたが、今回は例外らしく、昼食も時向には喰べられたし、重い荷物は、駅などに預けて、身軽に歩けたし、夜の勉強も一回きりなかつたので、疲れもせず、楽しい巡検でした。

一日目、東田子の浦では、景色のすばらしい海岸で、ルートマップを作る為にはハンドレベルで高土の測定をし、又土地改良後の浮島ヶ原に行き、ボーリングを行つたが、この時になつて、初めてヘラと棒のないのに気がつき、仕方なしに、代用品で固に合わせました。金谷では、茶の海の牧の原台地の原面へ行き、ボーリングなどを行つた。宿では、まだ疲れが足りないと思ひ羨容体操をしている元気な人達もいました。

二日目、台地原面の丸尾原と萩岡川への向では、露頭と段丘の観察。

御前崎では、その特徴と地形発達史的な説明、浜町では、斜交砂丘の説明を聞いた。この日は、ユースホステルに泊つたが、私達に気が利かないので先生は、御自分で食器を洗つたりなさいました。一番おかしかつた事は(失礼)先生が空のお風呂に入り、後でその時の様子を話して下さつたことと、又駿遠線の電車の中で、銭まわしをじて遊んだことでした。

三日目、盤田原台地で露頭を観察し、次いで盤田原の末端が、沖積面の下にはぐりこんでいるという状態を、ボーリングにより観察した。渥美半島の高松一色付近では、風化赤色土、古生層の山、波状をした台地についての説明を聞き、その後崖を下りて、崖下の中広い砂洲を波の音を聞きながら、ザクザク歩いた時の気持は、とてよいものでした。

一色で解散後、大部分の人は、古都の京都や奈良に行き、春を楽しんできたようです。

## 東 北 巡 検

三 年 生

「前期の試験が終つてほつとした時に大概は巡検があることになつてゐる。今回は横手、田沢湖、秋田、涌田、温湯、村上、新潟と東北地方をぐるりとまわるコース。この目的は三年生のことだから広い地域を地形、土地利用、人文にわたり広くしかも浅く見ることだつた。」「夜行で横手へ。ここでは夫狗山断層崖を見る目的だつたが時間がなくて山の麓へたどりつくのがやつとだつた。山はグーンと手前に迫り、これがかの有名な活断層かとよく見たが、予備知識がなければ、そこらにある丘陵と見分けがつかない。

変りばえのないものを形をみたり、構造をみたりして究明するところに地理屋の楽しみがあるのかしらん。秋晴れの空を背景にしたリンゴや柿等なりよめが気にかかる。横目でジロリ。」「田沢湖はまだ観光化されていない清らかな山<sup>奥</sup>の湖。夕方湖畔を歩くと、夕蔭がせまり黙々した山はだが水面にうつり、ひたひたした波打際、波の形をした水底かすけてみえる。岸辺は石莖や長石等白っぽい砂がしきつめられているようだ。夜駒攻科の方で二人一行に加わつた。」「翌日は秋田。秋田城跡はいき市内をみる。遠く海をへだて佐渡がみえ、手前に細長い秋田平野が広がり、八橋の赤井が高架線のように並んでいる。」「芭蕉の句、象潟や瀬にセイシがぬむの花、という象潟は車中より観察。鳥海山からの泥流丘に形のよい松が生えているが、地盤変動によりかつての美景はなくなつて水田に化していた。すでに頂上付近は雲をおさくつきりとした輪郭をとつた鳥海山が美しい。」